

## 阿部彩著『子どもの貧困Ⅱ ——解決策を考える』岩波新書（2014年）

「多くの人が納得できるデータを作りたい」という思いのもと貧困の可視化、そして、解決のために研究者の立場から挑んできた著者が、新書という媒体により広く社会に“子どもの貧困”についての議論をあらためて呼びかけた著作である。

著者は既に2008年に『子どもの貧困——日本の不公平を考える』（岩波新書）を世に送り出している。2008年は「日本の社会政策学者の間で『子どもの貧困元年』といわれる年」であり、日本社会において「健康保険でカバーされていない、いわゆる無保険の子どもの問題」など、子どもの貧困が“発見”され、政策論議のテーブルにのることとなった年とされている。そのような社会の変化が生み出されたことも、この著作によるところが大きかっただろう。

本書『子どもの貧困Ⅱ』は、タイトルの限りでは、その元年から5年余りを経ての続刊である。その5年を著者は「期待と失望と再度の期待というような目まぐるしい展開の連続」と表現している。子どもの貧困は“発見”されたものの、いざ支援策を具体化する段階になると、子ども手当には「バラマキ」という猛烈な非難が湧き起こることとなった。しかし、2013年には子どもの貧困対策法が成立し、解決に向けた期待が再び広がる。本書の帯にある「2013年子どもの貧困対策法成立——では、何をすればよいのか？」といったキャッチコピーには前向きな雰囲気だけが漂う。しかし、本書の読後感としては、むしろ、この5年間にあった失望を乗り越えた解決策を提示しなくてはならない、という著者の必死さが印象に残る。本書は、前著『子どもの貧困』に単純に“解決策”を付け足した続刊ではない。

さて、本書の内容である。「第1章 子どもの貧困の現状」では、就学援助費受給率などを通してみた子どもの間での「貧困の広がり」を最新のデータにより示すとともに、子どもの貧困対策に取り組む必要性を、貧困状態に陥っている子ども本人が直面する困難という問題ばかりでなく、貧困の放置が国や自治体の財政負担をはじめとした社会的損失につながることを根拠に主張する。同時に、「経済状況さえ改善すれば貧困はおのずと解消していく」という議論もあるが、著者は「(先進国では改善が) どれほど子どもの貧困の解消に役立つかはわからない」という見解を示し、「貧困削減そのものを目的とした具体的な政策」の必要性を訴える。

続く「第2章 要因は何か」では、貧困対策を検討するにあたって不可欠となる貧困の「連鎖の経路」の解明を試みる。ここで、著者は、金銭的経路や家庭環境ばかりでなく、健康、意識（意欲格差など）、そして、遺伝子までも検討を広げ、それぞれの要因としての妥当性を検討するとともに、「私たちが想定しているよりも大きく多彩な経路」が存在していることを示す。

「第3章 政策を選択する」以降の各章では、貧困削減のための具体策の検討が進められる。このなかで興味深いのが現金給付と現物給付についての論考である。「バラマキ」として批判された現金給付の子ども手当であるが、著者は慎重に言葉を選びながらも、手当の拡充が「再分配の逆転現象」の解消に効果があったことを示唆している。そして、現金給付自体についても「現金給付にすると、そのお金を親がどのように使うかを限定できないため、教育や保育サービスなどの現物支給のほうが優れていると考える人は多い」が、貧困に至る経路が多彩であることを踏まえると、「おカネでしか解決できないもの」があることを示し、現物（サービス）給付と同様に、現金給付も賢明な政策であることを主張する。そして、現金給付、現物（サービス）給付の両面において、解決策の効果とともに、社会からの受容可能性をも視野に入れた検討がすすめられる。

本書では、説得性を高めるためと思われるが、子どもの貧困の要因ばかりでなく、解決策についても幅広い論考が展開される。貧困対策についての思考の幅が広げられる刺激に富んだ一冊である。

（小熊 信）